宮崎県現代俳句協会会報

第５８号
2022.6.30
発行

発行所
宮崎県
現代俳句協会

発行人
山口木浦木

編集・事務局
吉村　豊
〒880-1224
宮崎県東諸県
国富深年 175
TEL・FAX
0985-75-8873

印刷所
(有)鉱脈社

創立三〇周年記念
22 みやざき現代俳句の集い

本会の創立三〇周年を記念して 俳詩「流域」の創刊五〇周年を迎えた宮崎俳句研究会との共催で右記の記念大会を六月四日・五日の二日間にわたって宮崎市のアートホテル宮崎で開催した。新型コロナウイルスの感染者数が県内で四〇〇人前後からなかなか減少しない中で、開催日が近づいてからはやや減少傾向となり無事開催出来た。

第一日目は午後から、現代俳句協会副会長の高野ムツオ先生を講師に招いて、記念講演と参加者作品の全句講評講座を行い、夜には記念式典と祝賀会を執り行った。

また、大会を記念して四〇名の会員が各二〇句ずつの記念句集を発行した。

記念講演は会員以外の俳人にも呼びかけて四五名の参加で、宮城県多賀城市在住の講師の東日本大震災被災体験と、その中での俳句作句についてスライドをまじえながら、御自身の句や地域の俳人の句、中央の著名俳人の震災俳句について具体的に紹介された。

全句講評講座では参加者の事前投句九四句について講師に選と講評を頂いた。

記念式典・祝賀会は講師の高野先生、県俳句協会の加賀会長、会報発行や流域の発行でお世話になっている鉱脈社社長を来賓にお招きして二四名の参加で行われ、本会発足以来の永年会員である宇田蓋男・玉木節花・永田タヱ子・福富健男・布施伊夜子の各氏が表彰を受けられた。創立以来三〇年であるが、それ以前に西日本現代俳句協会として九州一円での活動の経緯があり、この方々の活動が会にとって重要なものであった。

新型コロナの影響下で、会食を伴う久々の会合であり、昔話にも花が咲いて大いに盛り上がった。

二日目は午前中に宮崎俳句研究会句会として、月例会に会員以外の参加者をまじえ拡大例会の形で、高野先生の助言を頂きながら句会を行った。

記念講演要旨

講師：高野ムツオ先生

初めに大震災の被害状況の多数のスライドを紹介され、その後震災俳句について例句をあげて紹介された。

講師の被災当時の作品から

地震の闇百足となりて歩むべし

震災当日の作。交通機関が途絶えて家までの一三㎞を歩きながら作った。悠長なものでなく、何かしないと心が持たない。何が出来るか？唯一の手段が俳句だった。

不安げな若い女性も近くを歩いていたが、動きが機敏で蟻を思わせた。それに比べて自分は幼少の記憶から百足を連想した。

四肢へ地震ただ轟轟と轟轟と

数日後の作。最初に地震があった時の地下レストランでの体験。すさまじい揺れと

轟音。その音を表現しようとした。季語をどうする―未曽有の出来事で季語が邪魔になった。

膨れ這い捲れ攫えり大津波

大津波の巨大さ・凄さは名詞では表現できず動詞を四つ連ねた。作句のノウハウ…そんな段階ではない。

あとで気づいたが、師の佐藤鬼房や渡辺白泉らがこのような動詞表現を戦時中にやっていた。知らぬ間に師を継承していた。

季語はない、どこまで共感が広がるか？

車にも仰臥という死春の月

一週間後の作。車が死んだように横たわっている。仰向けにも。中には人の死もある。月はたまたま見た。変わらずに動いている。自分としては思いの表現が弱い。相反する評がある。

泥かぶるたびに角組み光る蘆

読売新聞記者岸本洋子氏から、震災についての文と俳句の寄稿依頼。これは受けざるを得ないと承諾し、ふと窓から川を見ると向う岸にきらきら輝くものがあり、蘆の芽だと思った。確かめるとさざ波だった。後で思えば時期的にまだ早かった。しかしこのようなとらえ方が詩人には大事である。

蘆は津波だけでなく台風や大雨・雪解け水など太古の昔から何度も泥をかぶっては出てくる。たまたま作ったフレーズから自分が感じ取ろうとしているものを教わった。

被災地の俳人の作品

双子なら同じ死顔桃の花　照井　翠

高校の先生で、被災した生徒を集めて夜を過ごし、身内の悲報に悲しむ子供たちへの対応に大変苦労した。

双子の死に顔を見たわけではないだろう。桃の花はひな祭りへの思い。

死んでなお人に影ある薄暑なり　渡辺誠一郎

塩竈市役所職員で事後対応に追われ、おそらくいくつもの葬に立ち会っただろう。

牛虻よ牛の泪を知ってゐるか　永瀬　十悟

何も言っていないが福島原発の放棄された牛たちの句。牛虻への呼びかけは人間に向けられる。

ぼうふらに会ひたるのみの帰宅かな　小原　啄葉

避難所に回る爪切り夕雲雀　柏原　眠雨

被災地以外の俳人の作品

津波のあとに老婆生きてあり死なぬ　金子　兜太

テレビを見ての俳句であろう。

「被災していなくて震災俳句がつくれるか？」、「被災者に対して後ろめたさがある」などがよく言われた。この句は作者の根底に生と死を見つめた戦争体験があり、実感している。「死なぬ」が詩型の力、バネにする。

梅雨茫々孤身の松のしかと立つ　友岡　子郷

陸善高田の一本松。孤身松に心が乗り移って自分の姿を見ている。

原子炉の無明の時間雪が降る　小川　軽舟

無明は仏語で原子炉を生み出した人間の無知。「雪が降る」の取り合わせが決まっている。

サンダルをさがすたましひ名取川　高柳　克弘

宇多喜代子の作品

短夜の赤子よもっともっと泣け

八月の赤子は今も宙を蹴る

いつの世の棄民か棄牛か斑雪

今日生まれ明日死ぬ牛の呱呱の声

俳句の力

高橋睦郎

三・一一大災に真に対応しえたのは、こと詩歌に限って言えば、詩でも短歌でもなく俳句ではないだろうか。理由は五七五なる究極最短の定型が含みこまざるをえなかった沈黙の量にあろう。

大峰あきら

全宇宙は実に言葉という不思議なもののうちにある。

全句講評講座

講師：高野ムツオ先生

投句数九四句から特選・入選・佳作を選んでいただいた。（配列投句番号順）

特選句

染みの手も握れば拳春一番　妹尾　題弘

きりっとした句。ウクライナのことを詠むならこんなさりげない句がよい。

げんげ草母と話すにひざまずく　亀田りんりん

母と車椅子といった映像が浮かんでくる。

ぢつと見る他なき戦余花の雨　池袋　寛

テレビを見る遠くにいる人の感想。「余花の雨」が作者の気持。

ふらここを子の見ゆるまで漕ぎにけり　有馬　進

「子の見ゆるまで」の子はいるのか、それともこの世にいないのか

夜の新樹見えざるものの羽音して　田上比呂美

「夜の新樹」は意味を消した効果が出ている。

入選句

原子炉を考えている青芒　長友　巖

色々考えさせる句。原子炉が必要か、人類の未来までを思っているのか。考える葦でなく青芒。

爆心地かに末黒の芒銀の雨　早川たから

「かに」は名詞には付かない。下の句のフレーズがよく、好きな句。

現し世を灯して暗し雛飾り　小倉　櫻子

ゆっくりした言葉づかいよし。季語が生きている。

小中の校門ひとつ山笑う　稲田シヅヲ

子供たちの表情や背景がよく分かる。

小豆入り玄米旨き薄暑かな　杉田みづ季

生活感がある。「旨し」の方がよい。

麦熟星安心おしと姑の声　河原　珠美

なぜ「安心おし」なのか解釈が難しい。しかし魅力的な句。

釉薬の乾く早さよ杉菜生ふ　矢野　照子

窯出しの作品に釉薬を塗るウキウキ感、外には春を喜び生ふ杉菜、この対比が良い。

こぼすなよ青水無月の汚染水　杉田みづ季

ひたひたと満ち来る潮や花は葉に　矢野　照子

天国へ行くこと勿れしやぼん玉　児玉　憲文

佳作句

反戦句碑は同志のたましい風光る　疋田恵美子

反戦の気持ちを詠う。戦争で亡くなった人の蘇りも詠んでいるか。

爺ちゃんに頭刈らるる蝶の昼　藤田　長汀

爺ちゃんは生きているのか死んでいるのか。成功しているが類想感あり。

突きし杖櫂に代へたし鳥雲に　藤本美智子

どこかに漕ぎ出したい気持ちか。少しばかり無理な表現。

野の花の多くはキク科戦火延ぶ　服部　修一

反骨精神。日本の象徴の菊、かつての戦争のことか。意味深いが観念的。

春満月魔女になりたく眼をとじる　玉木　節花

楽しい空想の句。リアリティに今ひとつ。

紫陽花の雨はアジサイいろの靴　相川　文子

「雨は」が分かりづらい。花とアジサイ色の靴を単純に並列した方が良い。

囀や隣家の雨戸閉ぢしまま　池水　侃

住む人がいなくなったか旅行中か不明。具体的に詠む。

いつか死にますから曼珠沙華笑ふ　佐藤　聡美

「いつか死にますから」はいいフレーズ。

麦秋や遥かな海のひかり出す　大爺真理子

麦秋や遠くを見る父父見る母　森武　晴美

夫婦の有り様がうらやましい

麦を踏む日々の暮しが此処にあり　遠目塚信子

事あらば遊水地なる植田澄む　藤本美智子

初夏やとび立ちそうなパンの耳　相川　文子

送葬の帰途たんぽぽの絮吹けり　藤原　李苑

蜘蛛の子を見せびらかして一年生　池水　侃

その他の作品（一人一句）

麦の秋家中音の消えゆけり　永田タヱ子

術後の友笑ふも痛し初ざくら　鳥居　達史

人の道鶴よロシアに帰るのか　吉村　豊

花らんまん上手くゆかうがゆくまいが　末吉　道子

わが村が桃源郷ぞ桜咲く　梶原　敏子

徐ろに人春泥を行き会へる　廉谷　展良

春日傘十年前の夫に逢う　桑原　淑子

ひまわりのモノクロとなりゆく不安　岸上　玲子

束縛のなき愛つらし髪洗ふ　亜灯りりな

息つぎを奪ふ抱擁星涼し　山口　彰子

水田に残花香るや西行忌　川口　正博

焼酎を呷る戦禍の曼陀羅絵　仁田脇一石
見わたせば初夏の波招かれし　大浦フサ子
紅のガーベラ咲く哉青若葉　川島　宏幸
夏の川時の流れに立ち尽くす　山口木浦木
栗野岳絶滅危惧種のオノヨーコ　福富　健男
戦争は要らぬ社の蝮草　海蔵由喜子
初夏や稀有な出来事夫料る　藤　野々子
花屑の逆巻く辻や傘の杖　鈴木　康之
雷鳴に赤子抱き寄せ夕餉かな　西澤　橙香
蛇穴を出でて戦の木をのぼる　岩切　雅人
遅咲きの桐の花下なる奇遇かな　布施伊夜子

記念句集正誤訂正

記念句集の訂正をお願いします
46ページ表の内容三つ目
1971昭46 ↓ 1970昭45に
流域創刊は会発足と同年でした。

令和四年度定期総会

令和四年二月二〇日一〇時から
宮崎市民プラザ

総会案内後の回答では例年なみの出席予定で、委任状もいただいていたが、二月になって県内での新型コロナの感染が急激に増加して開催が危ぶまれた。行政の方では蔓延防止の宣言は出されたが、会場の使用規制までには至らなかった。今回は六月の創立三〇周年の記念大会についての審議が必要だったために、出席は自主判断に任せて電話での採決委任を受ける形で、会員数三九名中出席者九名、委任者一八名という異例の開催となった。

事業計画・予算等はほぼ例年通りであるが、記念大会の準備金を前倒しで今年度に積み立てたことと、記念大会の内容の審議が特別な議題であった。

なお、役員については事務局の遠目塚信子氏の転出に伴って廉谷展良氏が後任に補充された。

以下、議決事項。

令和三年度事業実績
書面総会（二月十八日）
新春句会（中止）

前度決算並びに本年度予算

1　収入の部

	令和３年度決算額	令和４年度予算額
前年度繰越し	133,606	104,055
本部補助金	45,900	44,200
年会費	52,000	48,000
寄付金等	0	0
雑収入	7,950	3,745
合　計	239,456	200,000

2　支出の部

	令和３年度決算額	令和４年度予算額
会議費	0	20,000
事業費	2,910	15,000
旅費	0	25,000
印刷費	17,908	30,000
通信費	44,198	30,000
消耗品費	385	8,000
雑費	0	2,000
予備費	0	10,000
特別会計積立	70,000	60,000
合　計	135,401	200,000

吟行句会（中止）会報発行
（五六号・六月、五七号・十二月）
誌上句会（一〇月二〇日投句）

令和四年度事業計画
総会（二月二〇日）・新春俳句会（々）
創立記念大会（六月四・五日）
誌上句会（秋期に実施）
吟行句会（一一月頃）
会報発行
（五八号・六月、五九号・十二月）
理事会（一月）

令和四年度役員（ゴシック体は新）
顧問　福富健男
会長　山口木浦木
副会長　宇田蓋男・永田タヱ子・服部修一
理事　池袋寛・鈴木康之・妹尾題弘・玉木節花・長友巖・仁田脇一石・疋田恵美子・藤野々子・吉村豊
監事　清水睦子・川島宏幸
事務局長　吉村豊
会計　海蔵由喜子
事務局　亀田りんりん・**廉谷展良**
青年部長　吉村豊

新春句会（総会のあと午後から開催）

当日参加者予定のみの事前投句で、三六句を出席者九名で一〇句選

七点句

春風とバスへ乗り込む日向灘　永田タヱ子

明るさ、「乗り込む」の前向きさが良い。「春風」と「日向灘」の字面が付きすぎ。

六点句

地震ありてしばらく語る夜寒かな　服部　修一

先日の夜経験。具体的に見える。「夜寒」が効いていてマイナス語のたたみかけがよい。

大根煮て芋煮て母はもういない　長友　巖

昭和の母、味覚が思い出。予定調和の作りだが味わい深い。「もういないは」現代の働く母にも。

五点句

軽トラの犬の三匹猟期来る　藤　野々子

山手ではよく見る光景だが、さあ今からのワクワク感。「三」の数が良い。

四点句

耳掻きを遊ばす耳の三日かな　池袋　寛

「み」音の響き。女は三日も忙しいが男はヒマ。擬人法が良い。

狛犬もマスクの時代寒明くる　藤　野々子

ユーモアの中にこれからの春やコロナ退散への希望が感じられる。「も」は他のことまで広がってボケる。「マスク」が象徴的だが「時代」は少し大げさか。

真青なる日向の海よ冬桜　鈴木　康之

鵜戸神宮あたりでは山桜は二月から咲く。青い海との対比がきれい。壮大な情景、高屋窓秋の句を思い出す。

教会への道遠き春の泥　小倉　櫻子

今は舗装だが田舎の道？中七・下五で信仰を持つが神への距離感、あるいはそのことへの自戒が感じられる。

兜太碑へ独り詣でる初御空　海蔵由喜子

新年の抱負・心意気が感じられる。「独り」は言い過ぎだがこれが良い。

三点句

虫食いの穴に冬陽を透かしけり　亀田りんりん

「虫食い」は木の葉？お気に入りのセーター？

点描画「田園B」という瑛九（Q.Ei）の晩年　福富　健男

瑛九へのリスペクト。長い。

媼の歯嬰も二本や初笑　藤田　長汀

欠けゆくものと生じるものとの対比。媼は古い言葉。

人を招くブーゲンビリアのこの赤さ　服部　修一

人を迎える宮崎空港の冠名。満開の様子が目に浮かぶ。赤色は厳密でなくても良い。

戯れに摘みてたんとやせりなづな　池袋　寛

ついつい採ってしまうアルアル感。「戯れに」が良い。

まろまろと生きたき余生鏡餅　藤田　長汀

角無く丸く健やかな余生への願望。「まろ」が貴族のように生きたいとも。

二点句

くり言は老いの遊びか末の春　海蔵由喜子

ユーモラス。「末の春」は元気さアピール。

最果ての末端価格ふところ手　山口木浦木

国の中心から遠い本県は地場産品以外はすべて高く物価高が身に染みる。

干すなりに凍る白シャツ楽しみて　梶原　敏子

温暖な本県でも山間地はひどく寒い。それをも楽しむ心意気。「干すなりに凍る」で影像が見える。

酢っぱさを忘れる梅園満開です　永田タヱ子

梅の花と香りを「酢っぱさを忘れる」と誉めた。

凩に間がある父の忌は明日　長友　巌

凩と父の忌の二物配合。心のありよう。

ゴールまでアナログ人生海鼠酒　吉村　豊

開き直って、進化のない酒を酌む。

海幸彦発光キノコの宿る島　疋田恵美子

闇に光る茸が博物館の展示にあった。

去年今年忘れ去られる夢の数　山口木浦木

年の変わり目の感懐。

質問に頓珍漢な冬木立　亀田りんりん

かみ合わない二人の会話。冬木立が効いている。

一点句

切抜いた新聞の穴春コロナ　仁田脇一石

切り抜かれた新聞の喪失感とコロナの配合。

遍くに照らす満月賀状書く　川島　宏幸

気持ちよく賀状を書く光景。

明日恃む思ひも少し寝正月　妹尾　題弘

正月はゆっくりと。まだ希望がある。

ザトークジラここに漂着日向灘　疋田恵美子

便り来て傍らに咲く福寿草　川島　宏幸

嬉しい心が福寿草で読み手に伝わる。

加湿器の電源青く点れる夜　妹尾　題弘

コロナ禍の中で闇の青い光が不安を象徴。

子の父の水平線や一寒梅　仁田脇一石

かけ声と気合とストーブ冬の朝　梶原　敏子

朝の寒さに掛け声で向かうが、すぐにストーブに寄っていく。この弱さが良い。

コロナに雨ふくらめ庭の梅蕾　吉村　豊

閉塞感。春よ来い。

その他の句

恋の浦誰を待つ雪間草　小倉　櫻子

ジャズのドラム神道の葬儀の座に出会う　福富　健男

現人（うつせみ）の間違い探し福笑ひ　鈴木　康之

新入会員自己紹介

佐藤　聡美

一九五九年生まれ六二歳です。この度現代俳句協会に入会したことは、私にとって新たな出発です。

この春二〇年近くお世話になった句会が解散しました。会は形を変えて活動しますが、さみしいです。

先日は「みやざき現代俳句の集い」の記念講演と講座、そして句会に参加させて頂き大変勉強になりました。現代俳句協会に入会するにあたって不安がありました。しかしこの講座と句会を通じて少しだけ「みやざき現代俳句」を近くに感じることができました。

季語や定型を学びながら自分の心の表現に挑戦していきたいと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。

寄贈を頂いた句集

堀川かずこ句集「風の通り道」

北九州に拠点を置く「天籟通信」の同人で、令和二年に終刊となった「九州俳句」の編集発行を永い間支えて来られた堀川かずこ氏の第一句集である。

家事や趣味の洋裁・編み物・バドミントン・幾たびもの海外旅行、さらに「九州俳句」の事務局用務と色々なことをこなしながら日常生活の心の動きを切り取って作句されている。さらりと詠まれた中にひねりのきいたユーモアがあり、読後に爽やかな風が吹き抜ける。

春暁の口紅どれも出番待つ

轉りや地球どんどん軽くなる

涼しさは何もないこと皿洗う

柿を干す平和な風の通り道

あなたとは立体交差ごまめ噛む

お知らせ

○第五九回現代俳句全国大会作品募集

所定の投句用紙を使用して八月一日必着締め切り。用紙は事務局へ。

今年は北九州市のJRステーションホテルで一一月一二日（土）午後一時からの開催で参加しやすい。記念講演は詩人で多摩美術大学教授の平出隆先生。蕪村の話を中心の講演。

○令和四年度会費について

お忘れの方は海蔵由喜子さんへ

〒八八六-〇〇〇三

小林市堤三一二五-二〇

会員の動き

新入会　延岡市の佐藤聡美さんが入会された。（新入会員自己紹介参照）

編集後記

近年最大の行事であった創立三〇周年記念大会を皆様の御協力により、盛会裏に終えることが出来た。県内のコロナ感染者数が一向に減少しない中での開催で、実施が危ぶまれたが無事終わってホッとした。

講師の高野先生には二日間ぶっ通しで大変ご無理をお願いしたが、沢山お話を頂いて色々と学ぶことが多く、有難く有意義な大会であった。記念句集の発行も嬉しいことであった。（吉村　豊）